

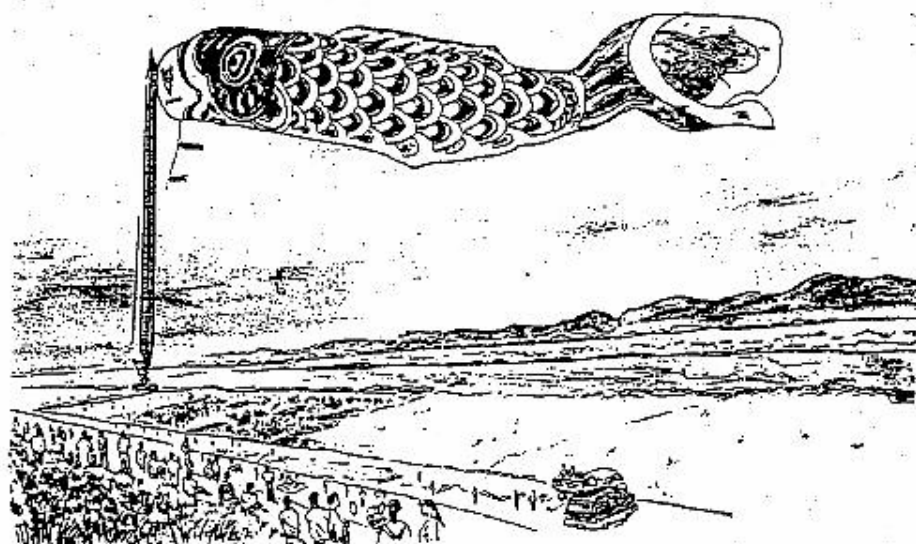
平成一〇年四月二六日（日）郷土研究会資料

マ

第二五四回 史跡めぐり

加須市と鷺宮町を訪ねる

越谷市郷土研究会



4/10

第二一五四回 史跡めぐり案内

日時 平成十年四月二十六日(日)

集合 越谷駅東口前 午前九時

(下り準急 九時十五分に乗車)

行先 加須市と鷲宮町

コース 越谷駅→加須駅→千方神社→光明寺→会の川親水公園→龍蔵寺→総願寺(不動)→不動岡公園(昼食)

→加須駅→鷲宮駅→鷲宮神社(ふるさとの森)→霊

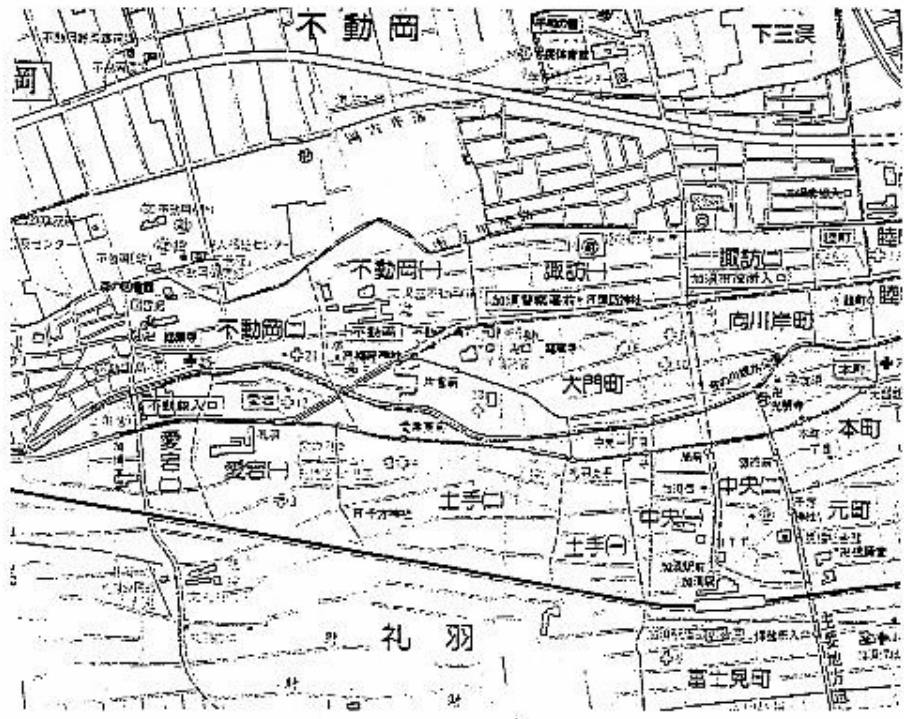
樹寺→鷲宮駅→越谷駅 解散

案内者 副会長 鈴木 秀俊

参加費 金一、五〇〇円

(交通費、資料代その他含む)

主催 越谷市郷土研究会



加須市（かぞし）

人口 六八、九九一人（今年三月一日現在）、面積 五八、八〇平方丈

埼玉県の北東端に位置する田園都市。東は北川辺町・大利根町・栗橋町、南東は菫蒲町・騎西町、北西は行田市、羽生市に境を接し、北は利根川を隔てて群馬県と対している。

昭和二十九年五月、旧加須町と不動岡町・三俣村・礼羽村・大桑村・水深村・樋遣川村・志多見村が合併して市制を施行、加須市となり、同三十二年一月に大越村を編入して今日に及んでいる。

市域は利根川右岸の沖積平野を占め、地勢はおおむね平坦、かつて利根川の本・支流の乱流地帯であったため、各所に河畔砂丘・自然堤防が散在し、南部を会の川と菫西用水が東流する。中央部には、新槐堀・手子堀など、東へ流れる多くの水路がある。

会の川南岸の河畔砂丘上に形成される加須の街は、近世初期、日光街道の幸手宿と中山道の熊谷宿を結ぶ、脇往還沿いにできた宿場町が起りこりとされる。宿場町は、近郷農村相手の市場町を兼ねて発展し、五・十の市日は、特産の青綿の取引で賑わった。

産業面では、被服縫製業が盛んで羽生・行田とともに「衣料の町」として知られている。全国産高の八十羽を占める「鯉のぼり」や、東日本の七十羽を生産する剣道具、柔道着、野球用具の製作も特筆される。市街東郊に造成された加須工業団地には、タイヤ、サッシ・紙・化学などの誘致工場が立地している。

農業は米作りのほか、野菜のハウス園芸、畜産が行われ、イチゴの特産がある。

◎加須（かぞ）の地名

古くは田園簿に加増村、貞享元年（一六八四）の久喜廢場村数覚（伊達家文書）には神増村、元禄郷帳では加須村とあり、元禄期（一六八八〜一七〇四）には加須が用いられるようになったと思われる。



市の鎮り地 千方神社（旧加須）



千方神社

千方（ちかた）神社は、古くから旧加須村（現加須市加須）の鎮守様として多くの人の信仰を集めている神社で、祭神は神日本磐余彦命（神武天皇）をまつている。

千方神社の社名をもつ神社は、北埼玉郡内では加須市礼羽、羽生市堤にあり、いずれも祭神は同じである。

神社の由来については、羽生市堤の千方神社の社伝によれば、平安時代に下野國（栃木県）の豪族として知られた後藤六秀郷（藤原秀郷）の六男修理六六千方をまつたところから、この社名が付いたといい、ここの神社も同じ由来を伝えている。

藤原秀郷は平安時代の前期、下野國の押領使となり、天慶三年（九四〇）に起きた平将門の乱には、平貞盛と協力して将門を打ち破り、その功により下野守となった豪族で、東國の武士團の小山氏、結城氏、下河辺氏などをはじめ、多くの武士團の祖となっている。

「石敢當」（せきかんとう）市指定文化財

この石敢當は、文化年間に加須の五・十市の世話人たちによって、市の神様として信仰されたという言い伝えがある。

石敢當とは中国の力士の姓名で、この人の名を石に刻んで守護神としたのが始まりであるが、信仰から疫病除けとしたものと思われ、関東地方には極めて稀で九州地方には多く見うけられる。

この石敢當の筆跡は、当時江戸でも有名な漢字者であり、書家でもあつ

た亀田鵬斎の書いたもので、「文化十四年（一八一七）丁丑十一月長至日、鵬斎陳人興書」と刻まれている。

また、近くには『芭蕉の句碑』がある。

今日ばかり 人もとしとれ 初しぐれ

はせを

光明寺

新編武蔵風土記稿に「浄土宗、上野国邑樂郡館林、善導寺の末、暹照山臺嶽院と号す」とあり、本尊は阿弥陀如来。臨侍に観音菩薩、勢至菩薩を祀る。開山南海上人は元龜二年（一五七一）二月に草創して、天正十二年二月十五日に寂した。

光明寺の三尊は寄木作りの立像で、室町時代の作と推定され、光背や蓮台は文政年間（一八一八〜一八二九）に補足した、と光背の裏面に記されている。

市の指定有形文化財である。

また、境内には身の丈三割余りの子育て観音の石仏がある。

毎年八月十七日、昼は光明寺の施餓鬼が行われ、夜になると乳房観音祭りが催される。子供の健やかな成長を観音様に祈るこの行事は、子供会が主体となり大人達も入って、万燈を立て、その周りを囲んで賑やかに郷土民謡がおどられる。



光明寺

△云の川親水公園

会の川は、文祿三年（一五九四）まで利根川の本流であったとされる川である。それまで利根川は川俣付近で二派に分流していたといわれ、一派は東へ現在の河道を流れて外野（現加須市）・佐波（現大利根町）間を南下し、浅間川筋を流れて川口（現加須市）で会の川と合流、一派は南の方に流れ、志多見や加須を経て川口に至る会の川筋で、川口から古利根川筋を流下した。

忍城（現行田市）の城主松平忠吉は付家老小笠原三郎右衛門吉次に命じて、川俣で乱流する利根川の流路の整理を図った。文祿三年と伝えるが、南流していた本流（会の川筋）を新郷に堤を築いて締め切り、東流する流路一筋にした。これによって会の川は利根川から切り離され、古利根川の一支流となったのである。

現在、会の川の一部は親水公園として、市民の憩いの場となっている。



山門

龍蔵寺

無着山（山門には古仏眼山の額）龍光院と号する浄土宗の寺で本尊は阿弥陀如来を祀る。元祿九年（一六九六）の浄土宗寺院由緒書によると、南北朝時代の文和四年（一三五五）慈智翁教蔵上人の創建と伝えている。教蔵上人は樋遣川聖徳寺寺開山唱名上人の弟子で、藤田派の僧であった。

一説には、昔、この辺り一帯は利根川の中洲になっていて鬼島といわれ、邪悪な白龍が住んでいて村人は大変困っていた。そのとき教蔵上人は、この地に一庵を結び、称名七日間の念佛を行ったところ、目の前に大きな白龍が現れのたうち回って苦しんだ。更に十念を授けると、その姿は忽然と消えて、それから村人が白龍に苦しめられることは無くなったという。



龍藏寺

そこで教蔵上人は、この地に一寺を建立し、龍の字と上人の蔵の字とを合わせて「龍蔵寺」と名付けたと伝える。江戸時代には、徳川将軍家の掃依が厚く、慶安二年（一六四九）十月十七日、二代家光より寺領二十二石余が寄進され、代々安堵された。家光から十四代家茂までの朱印状が現存している。

寺域は約八千五百平方尺、堂宇は、天保六年川俣の工匠三村正利氏の設計・建築による本堂や古びた山門、庫裏などを備える。本尊の木造阿彌陀如來立像は県指定の文化財で、像高一・三尺、桧材の寄木造り、目は玉眼。来迎印を結び、胎内に永仁元年（一二九三）性信上人の弟子の唯信が、武州慈恩寺村（岩槻市）の仏師大進に造らせて奉納した旨の墨書銘がある。唯信は正慶元年（一三三二）、長福寺（行田市）に阿彌陀如來（県指定文化財）を寄進した、「沙門唯信」と同一人物とみられている。

龍蔵寺の大いちょう

樹齢約六百二十年といわれ、教蔵上人のお手植えと伝える。樹周四・三尺、高さ約五十尺の大木で、昭和五十年四月に「一市の木」に指定されている。

松尾願寺

加須駅の北西約二岐にある真言宗の寺で、玉島山と号し、本尊は不動明王を祀り、不動岡不動尊と呼ばれている。当寺は不動堂の別当寺として創建された。

縁起によると、不動岡の南をながれる会の川が度々氾濫を繰り返して不作の時、川岸に流れ着いた不動像を安置



総願寺

して堂宇を建立したのが不動堂の始まりという。長暦年間（一〇三七〜四〇）とも承暦年中（一〇七七〜八一）ともいわれる。一時は隆盛を極めたがしだいに衰えて永禄（一五五八〜七〇）頃の合戦によって堂宇のほとんどは荒廢してしまった。羽生城主木戸忠朝の祈願所で、忠朝より剣一振を奉納されたのは荒廢する以前のこととされる。

十七世紀須、青智が不動堂を再建、総願寺を髷山し不動堂の別当寺とした。当初は上野生村正覚院（羽生市）の末であったが、不動尊信仰は年々盛んになり、宣永二年（一七二五）には江戸深川永代寺八幡社内において、本尊の出現帳を行っている。毎月二十八日の縁日はもちろん、一月二十八日の縁日には近在より参詣の男女が群衆するようになり、正徳元年（一七一）には新たに不動堂への道の開通を願い出ている。この頃上野館林藩主松平清武の祈願所として庇護されていたようで、数十通の書状が残されている。

不動尊信仰を支えられて経済力を持つようになった結果、正覚院の末寺格から弘化二年（一八四五）京都仁和寺の直末となった。

仁三門をくぐると、正面にどっしりとした不動堂がたつ。天保年間（一八三〜四四）の再建で、桁行・梁間とも八間、崖根銅板葺入母屋造り、再建絵図面は建築史上貴重なものとして現存する唯一の門である。境内の一隅にある絵ケヤキ造りの黒門は、忍城（行田市）の城門（北谷門）として現存する唯一の門で、明治二十二年に移築された。元文四年（一七三九）に奉納されたと考えられる俱利迦羅不動劍。鎌倉時代中期と思われる散華模様板碑。天保十四年在銘の室蓋百五十回忌追善供養句碑などがある。

鷺宮古口町

北葛飾郡。人口三四、四一五人（平成十年三月一日現在）、面積一三、七三平方メートル。東武伊勢崎線鷺宮駅と東北線東鷺宮駅がある。

県の北東部に位置する町で、東は幸手市、南は久喜市、北は栗橋町に各々接している。昭和二十九年九月、旧鷺宮町と桜田村の一部が合併して誕生した。

町は古利根川の沖積低地を占め、所々に海拔十メートル前後、比高三メートル程の台地が散在する。町域の北西部、古利根川の自然堤防上に形成される首邑の鷺宮市街は、鷺宮神社の門前町として鎌倉時代に開かれたといわれ、江戸時代には市場町を兼ねて発展し、五・十の市日は穀類・木綿の取引で賑わった。

産業界では農業が中心で、米作りのほか、野菜のハウス園芸、ナシの栽培などが行われるが、近年宅地化が進んでいる。見所としては、鷺宮神社、蓋樹寺、宝泉寺池などがある。

鷺宮古口神社

旧県社で、鷺宮駅の北、徒歩約十分、鷺宮市街の西の外れに鎮座する。祭神は武蔵国造の遠祖、天穗日命、武夷鳥命、大己貴命ほか九神を合祀する。今から千九百年余り前の景行天皇の御代、日本武尊の創建、あるいは古くは土師の言と称し、出雲族の草創ともいわれて社歴は古い。伝えはともかく、神社境内付近には縄文・平安時代の遺跡（県指定史跡・鷺宮堀内遺跡）が散在して、この辺りが早い時代から開けたことが知られる。

中世以降、関東の総社また関東鎮護の神として諸武将の崇敬を集め、藤原秀郷、源義家、鎌倉時代には建久四年（一一九三）源頼朝の神馬奉獻、社殿造営。建長三年（一二五一）北条時頼（鎌倉幕府五代執権）の神楽奉納、正應五年（一二七



(二) 北条貞時（鎌倉幕府九代執権）社殿造営、應安五年（一三七二）小山義政の社殿修復などが、神社所蔵文書に記録されている。室町時代に至り、足利氏・古河公方などの手厚い保護を受け、天正十九年（一五九一）徳川家康から県内では最高の四百石の朱印地を寄進された。

神域は広く約三万四千平方尺、鬱蒼と茂りあう杉木立に囲まれて、安政六年（一八五九）遣立の社殿、それに向かい合って神楽殿がたつ。社室には国指定重要文化財の太刀や県指定文化財の鏡、古文書などがあり、神社に伝承される『土師一流備馬楽神楽』国の指定重要無形民俗文化財になっている。

昔は「大鳥大明神」とも呼ばれたが、その大鳥が「取り」に通じるため、江戸時代から得分を祈る商人の参詣が多かった。今も十二月初酉の日の「酉の市」は、近在からの人出で賑わう。

所蔵文化財

- 一、太刀一口 重要文化財
- 二、銅製双鶴蓬菜文鏡 一面
国指定（大正三、四、十七）銘「備中園住人言次作一、永和二年卯月十九日（一三九六）小山下野守義政寄進
- 三、銅製双鶴蓬菜文鏡 一面
国指定有形文化財（工芸品）指定（昭和三十一、十一、一）鎌倉時代の典型的な鑄造
- 三、銅製桐紋方鏡一面 沈金彫鏡管 一合
重要指定（昭和十六、七、十七）工芸品、県指定有形文化財、桃山時代の白銅製の方形の鏡と管
- 四、銅製蓬菜文鏡 一面



社殿全景（昭和四十八年四月）

重要指定（工芸品）県指定有形文化財、室町時代中国の伝説に基づいた蓬萊山文様の銅鏡

五、銅製御正体 二面（工芸品）

重要指定 県指定有形文化財 室町時代の作、文安二年（一四四五）長祿二年（一四五八）の銘あり。

六、鷲宮神社古文書（県指定有形文化財 二十四点）

室町時代から戦国時代の中世文書、足利氏、北条氏、太田氏に関するもの棟札一枚、文祿四年社殿造営に関するもの。

七、鷲宮催馬楽神楽（国指定重要無形民俗文化財）

土謡一流催馬楽神楽といわれ、神楽歌に平安時代の俗謡である催馬楽を採り入れている点に特徴がある。一曲一座形式の十二座という曲目構成で奉奏されるようになったのは、宝永五年（一七〇八）ごろからであることが、天保年間（一八三〇）一八四三）に藤原國政記すところの「鷲宮古代神楽正録」などから知ることができ、組織は舞人のほか笛・大拍子・大太鼓・謡方からなる。各曲は記紀の国家起源神話を主題にしており、関東神楽の源流として有名である。

八、寛保治水の碑

鷲宮神社の境内、拝殿前にたつ石灯籠で、江戸時代中期の寛保三年（一七四二）、空前の大旱による利根川決

壊のさい、幕府の命により、西国の諸大名とともに、堤防修築に当たった長州（山口県）萩藩主毛利宗広が、工事の完了後、鷲宮神社の加護を感謝して奉納した碑である。

一刀瀬上流以重修治告成碑一服部重邦の撰文、長州学士津日泰之謹書 高さ二・六尺。

◎ 聖跡

境内に明治天皇の聖跡碑三基あり、町内にも二基あり、



（寛保治水の碑）

社務所内に御小休所が現存する。聖跡碑題目は、伯爵金子堅太郎謹書、及び徳富蘇峯恭書、碑文は渡辺幾治郎謹書。

◎ 指定史跡 わしのみや堀内遺跡

鷺宮町大字鷺宮字堀内二一四九番地、当鷺宮神社々地及び周辺地区は、これ上代人の住居跡地にして縄文・弥生・古墳時代の複合遺跡と称される史跡なり。(昭和四十八年一月)

上代の 人住みしあと 堀の内 遺跡と呼べり 今は名付けて

昔より 浮島と呼び 知られけり 小高き丘の 鷺の宮社地

古くより 人住めるらし 縄文の 土器出づるわが 鷺の宮社地

土器もあり かまどもありぬ 昔人 住みし跡地を 掘り調べれば

記録して 残し伝へむ 後の代に わが鷺の宮 堀の内遺跡を

雪並樹土寺

鷺宮駅の北、約七百呎の所にある禪宗曹洞派の寺院で、陸奥国白川関川寺末、鷺宮山鶴松院と号す。開山は法光万宝庭拾、大永五年(一一一五)八月十日寂す。

山門を入ると、小じんまりとした境内に、本堂・庫裏が並ぶ、本堂に安置された木造釈迦如来座像は町指定文化財で、平安末〜鎌倉初期(十二世紀)の作、像高八七・二寸、面相はまるく穏やか、全体にゆったりとした量感がある。明治の初め、神仏分離のとき廃寺になった鷺宮神社の別当、大乗院から移安したものである。

引用・参考文献

埼玉県の地名(郷土歴史大事典) 人文社

観光と旅(郷土資料事典) 人文社

加須市史 加須市役所

鷺宮神社資料 鷺宮神社社務所

編集 鈴木秀俊

鷲宮神社参詣

蘇峰生

晩秋の関東平野の眺めも、亦た無味の中に有味の風情がある。我等は所以ありて、去る十九日（昭和八年十一月）埼玉県南埼玉郡鷲宮神社に参詣した。

此の神社は往古より武蔵国に由緒ある神社の一と承る。香妻鏡などにも、しばしば記載せられたる程なれば、その時代から崇敬からぬ神社であつたことが判る。祭神は天穗日命にて、別座に大國主命を合祀している。

凡そ神社の配布の蹟を尋れば、往時に於ける我等祖先の足跡が自から推測せらるる。鷲宮は本来土師宮と称したと云へば、此神社が土師一族と由緒あることが想定せらるる。何れにしても此の神社が、武蔵平原を開拓したる祖先によりて建立せられたるには、それぞれの理由及び事情があるべき筈だ。

神苑の域は八千余坪、附近の民有地を併せて一万坪内外の森林にて、其中には神木と称する巨杉、若しくは高野槇、特に銀杏の大樹が多くて、琥珀色の黄葉は、翠枝と接して、一段の景趣を添へた。

我等は参拝の後に、社室を拜見した。国宝の刀剣は遊就館に出品中だと聞いた。尤も奇とす可きは文禄四年の棟札だ。一枚の木片だが、多くの史実が掲げてある。古文書は鎌倉時代から室町時代、戦国時代のもの、特に古河公方家、小田原北条実に関するものが多かつた。徳川家康を首として、歴代將軍の朱印があつた。大宮は武蔵一の宮であつたに拘らず、三百石の朱印であつたが鷲宮は四百石の朱印がある。徳川時代、如何に此の宮が繁昌したるかを知るべしだ。

我等は附近の明治天皇の明治二十九年十月二十一日、近衛師團演習御親閲の聖蹟を尋ね、更に当社に保存する十二座神楽中の第四「降臨御先猿田彦鈿女の段」の演舞を親、勿々帰途に就いた。

往路は千住から御成街道を經、草加、越ヶ谷、柏壁、幸手等を經、帰路には、岩槻、大宮、浦和、板橋の中仙道を経て、往復共に、晩秋の風物を満喫した。特に翠松に挟まれたる御成街道や、浦和東京間の新道や、新旧の対照、何れも悦ぶ可し。然も帰路は珍らし、も紅輪の関東平野に没するを見、何となく嘗て満州に於ける落日を想い出した。旭光も美であるが、落日の美は更に美である。

□こいのぼり



傘や提灯をつくっていた職人たちによってつくられはじめたこいのぼり。戦前から日本一の生産量を誇っています。手描きのこいのぼりはやがて、化学繊維のプリントものが主流となりましたが、そのすばらしさは全国的に注目されています。

また、その手描きのすばらしさを生かし、大勢の市民の手によって1988年(昭和63年)2月にジャンボこいのぼりが完成しました。毎年5月初旬の市民平和祭には全長100m、重さ600kgのこいのぼりが利根川の上空を遊泳「こいのぼりのふるさと・加須」を全国にアピールします。

▶不動堂の鬼追い 豆まき式

◎2月節分
／総願寺

350年の伝統を誇る勇壮な「鬼追い豆まき式」として関東でも有名な行事です。赤々と燃えた大松明(おおたいまつ)こん棒・銅を持った赤・青・黒の3匹の鬼たちが不動堂の回廊を駆け回り、年男・年女が一齐に「鬼は外、福は内」と叫びながら豆を鬼めかけて投げつけます。無病息災・五穀豊穰・家内安全・商売繁昌を祈願する火勢の参詣者で毎年にごわいます。

